

# 東北大学方言研究センターの取り組み

小林 隆

東北大学方言研究センターでは、学生たちとともに、この1年間、震災と方言をめぐるさまざまな課題に取り組んできた。すなわち、小林の担当する方言学の授業のなかで、具体的な問題を洗い出し、複数のチームに分かれて検討を行った。そこでは、インターネットや図書館などを通じて基礎的な情報・文献を入手する一方、さまざまな公共機関や新聞社にも足を運んだ。また、現地を訪れ被災者や支援者の方々から直接お話をうかがうとともに、被災地の言語景観を調査した。それらの結果は、授業のなかで発表され議論された。この報告書の第I部の内容は、そうした活動の成果であり、チームごとの報告を最終的にリーダーの大学院生たちがまとめたものである（注）。

さて、このような取り組みを開始するに当たり、まず、震災と方言に関するさまざまな問題点を概観した。具体的には次のような課題を見出した。

## 課題1 被災地についての情報収集（＝取り組みの前提を準備する）

- ・どのような被害が起こっているか。
  - 災害の種類と被災の実態について状況を把握する。
- ・被災地とはどこなのか。
  - 被災地地図を作成し、地理的な広がりの中で被災地を認識する。
- ・被災地の人々（被災者）は怎么样了のか。
  - 人口の減少や避難の状況について把握する。

## 課題2 被災地の方言の特徴（＝方言学的に方言を把握する）

- ・被災地の方言とはそもそもどのような方言なのか。
  - 従来の研究を整理し特徴を把握する。区画論的位置づけと体系的・地理的特徴。
- ・それらについてどのような研究が行われてきたのか。
  - 研究文献や資料の目録を作成することで、研究の現状を把握する。
- ・方言の記録として不足している部分は何か。
  - 上記の作業を通して、今後取り組むべき課題を見出す。

## 課題3 被災地の方言の現状と将来（＝方言と方言学の将来について考える）

- ・どのような方言が消滅の危機に瀕しているのか。
  - 被災地地図と方言地図との対比により消えていく方言を把握する。
- ・その方言の消滅は方言学にどのような影響を与えるのか。
  - 類型論や方言圏論などの観点から影響を考える。
- ・今後、被災地の方言はどうなっていくのか。

→消滅・統合・拡散、あるいは共通語化などいなる現象が予想されるか。

#### **課題4 被災地の方言の保存**（＝方言学的な支援のあり方を検討する）

- ・被災地の方言を記録するにはどうしたらよいか。
  - 被災・避難という状況下での方言調査の計画について考える。
- ・被災地の方言の継承を考えるには何が必要か。
  - 若い世代への継承の必要性とその方法について検討する。
- ・被災地の方言はどのように保存されるべきか。
  - 学術的な保存と社会的な保存の方法の両面を考える。

#### **課題5 被災地の方言をめぐる社会的問題**（＝社会方言学・実践方言学に踏み出す）

- ・被災地において見られる方言の社会的問題とはどのようなものか。
  - 救援隊・医療関係者・ボランティアと被災地方言との関係についてなど。
- ・住民の避難に伴い方言にどのような問題が生じているのか。
  - 避難先の方言との間に起こる摩擦・トラブルについて考える。
- ・それらの問題に対して、どのような取り組みを行うことができるか。
  - 摩擦・トラブルを回避・解消するための方策について考える。

#### **課題6 被災地における方言の意義**（＝方言機能論の立場から方言をとらえる）

- ・被災地の住民は地元の方言に対してどのような感情を抱いているか。
  - 方言を自覚的に意識しコミュニティや避難先での連帯感維持に役立てているか。
- ・復興支援者は被災地の方言をどのような目で見ているか。
  - 外から入り込んだ人々の、地元方言に対する見方はどのようなものか。
- ・方言は被災地の住民を励ますためにどのように利用されているか。
  - 救援隊やタレント、あるいは行政が作成する標語などの方言利用について。

以上のように、震災と方言をめぐる課題は、方言研究の基礎から実践的な側面に至るまで広範囲に及ぶ。また、今すぐ取り組める課題と、長期的展望に立って慎重に進めるべき課題とが存在する。その点を見極めながら、われわれスタッフができうる範囲でテーマを設定し、取り組みを行った。この報告書では、それらの成果を次の6つの角度から紹介する。

- (1) 被災地の方言の特徴
- (2) 消えゆく被災地の貴重な方言
- (3) 被災者を支える方言
- (4) 支援者の方言理解のために
- (5) 方言保存のさまざまな方法
- (6) 未来に残す被災地の方言

地震発生直後、われわれの最初の取り組みは、これまで調査でお世話になった方々にお見舞いの手紙を送ることや、ホームページに被災者を励ますメッセージを掲載することから始まった。しだいに、震災の様子が明らかになる中で、方言をとりまくさまざまな課題が見えてくるようになり、今回の取り組みへと発展していった。

最初に記したように、今回の取り組みは学生たちが主体となって行ったものである。学生たちがこの活動を通して、震災の中にある方言という存在に真摯に向かい合ったことは間違いない。そこで得られたものは、学生ひとりひとりにとって大きな意味をもつはずである。しかしながら、一方で、この種の取り組みとしてははなはだ不完全であり、不十分さが残ることは否めない。今回のものは、文字通りの中間報告であると言わざるを得ない。

その点では、この報告書をご覧くださった方々に、いろいろご教示をいただければありがたいと思っている。また、ここで示したような多くの課題が、われわれだけで解決できるとはとうてい思われぬ。本格的な活動のためには、たくさんの方々の参加が必要であることは、最初から目に見えているのである。これを機に、こうした取り組みが大きく前進することを願うとともに、そうしたことのひとつのきっかけに、この報告書がなることを期待している。

最後に、今回の活動に参加したわれわれのメンバーを紹介しておく。

専門研究員：中西太郎

大学院生：椎名渉子、田附敏尚、川越めぐみ、内間早俊、津田智史、魏ふく子、坂喜美佳、石山理恵、貝野瀬美那、小原雄次郎、佐藤亜実、趙倩婧、劉玉濛、金美英

学部生：田茂慧祐、浦藤駿気、飯塚敦史、猪狩慶紀、大場雄司、尾形千里、奥山浩佳、菊地恵太、工藤千桜秀、佐倉友季絵、佐々木遥子、佐藤加奈、平松且企、青木佳世

学部研究生：黄川川

学部特別聴講生：エディリマンナ・ジャヌーカ

**注：**この報告書の第Ⅰ部として提示する内容は、昨年10月9日に行った研究報告会「東日本大震災と方言」（於 仙台国際センター）のために作成した報告書、『東日本大震災と方言』をもとにしたものである。ただし、今回の最終報告を作成するに当たり、新たな観点からの分析を加えたり、文献目録を改訂したりするなど、その後の活動の成果も取り込んである。